

『ダーバヴィル家のテス』における織物の意味¹

木原 貴子

Tess in Texture : The Meaning of Fabric in *Tess of the d'Urbervilles*

Takako KIHARA

『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*)において、テス・ダービフィールド(Tess Durbeyfield)は様々な衣服を纏い、様々な姿でテキストに現れる。しかし、その多様性は決して彼女の所有する衣服の豊富さを表すものではなく、彼女自身の(時に階級を越えた)変化に応じたものである。つまり、彼女が身につける様々な衣服を「読む」ことによって、彼女の多様性を認識することができるのではないだろうか。更にこのテキストには、例えばリボンやボネット、シャツや旗等、彼女を取り巻き、包み込む実物として、或いはイメージや比喻といった象徴として、様々な様態の織物が描かれている。そして、それぞれがテスについて、或いは物語の展開について、更には、当時の性哲学について語る、言わば読まれる「織物テキスト」となっていると考えられる。本論では、『テス』という言語テキストの中で、織物を繋ぎ合わせることによって表出するもう一つのテキスト、「織物テキスト」の紡ぎ出す意味を読み解いていく。

I

『テス』において、衣服や装飾品、その他の布等の織物は、単にテスの肉体を包み、保温や防御、或いは装飾するだけのものではない。例えば、作品中には衣服や装飾品が彼女を認識するきっかけとなる場面が描かれている。物語の冒頭、テスは白いドレスを着た一団の一人として登場するが、彼女を他の少女たちから区別するのは容易である。というのは、白い集団の中で、テスは唯一人「赤いリボン」を付けているからである(35)。また、真っ暗なチェイスの森でアレク(Alec d'Urberville)が彼女を発見するのは、彼女の「白いモスリン」(88)が足に触れたからであり、またエンジェル(Angel Clare)が雑草の中に身を潜めていた彼女に気づくのも、彼女の着ていた「明るい色の夏服」(135)が目にとまったからである。また、衣服が汚れてしまうことは、彼女にとって不吉な前兆の象徴である。真っ白なドレスに付いた染みは、無垢な彼女に刻み込まれるであろう、肉体的、精神的「染み」を予兆するものであり、また自分の不注意から死なせてしまった馬の血を浴びて真っ赤に染まった姿(51)は、アレクによって全身を赤い薔薇で飾られる姿(59)へと連鎖していくのである。²つまり、衣服にはテスを認知・認識させる役割や、物語の展開における伏線としての機能が認められるのである。

或いは、衣服が彼女の内面と一体化し、共感しているような場面も認めることができる。例えば、後ろから追って来る者(アレク)を意識するあまり、背中だけではなく、衣服さえも視

線を感じるかのように思われる：“Her back seemed to be endowed with a sensitiveness to ocular beams — even her clothing” (293). 或いは、アレクにキスされた頬をハンカチで拭うのは彼に対する嫌悪の表明であり(71)、彼の顔に目がけて投げ付ける手袋は、彼女の憎悪を代弁するものなのである(315)。こうした思いはテスが言葉にできない感情である。つまり『テス』において、衣服や布といった織物にはそれ本来の機能だけではなく、構成においては物語の展開に関わる情報を伝達し、或いは彼女の肉体、存在自体を表出させ、内面的には彼女の言葉にならない感情や感覚、意志を表現するという、様々なレベルで彼女を読み取るための、有効な手段として機能しているのではないだろうか。そして、テスと織物のこうした密接さは、彼女を取り巻く男性たちとの関わりにおいて顕著に認められるのである。

II

織物テキスト的視点からテスを観察するとき、肉体を包む織物、衣服はそれ自体が記号としてテスについての様々な側面、情報を伝える機能をもっている。そして、それはテス個人に留まらず、ヴィクトリア朝という時代の、とりわけ性哲学を「語る」のである。先にも言及したように、物語の冒頭、テスは白い花を携え、白いドレスを纏い、登場する。白いドレスのテスは、内面的にも、肉体的にも「経験という色に染まっていない」無垢な少女である(36)。そして、その姿はウィリアムズが “In the beginning she is ‘blank as snow’, totally ignorant of the facts of life as every Victorian girl was expected to be” と指摘するように、「ヴィクトリア朝の少女」の模範になり得る純潔と純真さを体現している姿である(Williams 183)。しかし、彼女は白い集団の中で、ただ一人赤いリボンを付けており、とりわけこの「赤」という色彩が、この模範から逸脱する読みや解釈を喚起する。すなわち、J.H. ミラーは、この装飾品を「創造と破壊の力」を示す赤の連鎖の始まりと捉え(Miller 123)、また、タナーは物語終盤で流されるアレクの血を予言するものと解釈する(Tanner 21)。そして、純潔と純真さを象徴する白い空間に浮き上がる赤いリボンは、彼女の肉体に刻まれたもう一つの赤い点、「牡丹のような唇」(35)とともに、彼女のセクシュアリティ(sexuality)を表面化させているのではないだろうか。³

衣服が明らかに、テスのセクシュアリティを表出させる役割を担っていると考えられる場面も描かれている。テスがトラントリッジ(Trantridge)に出発する朝、母親は彼女が親戚の息子(アレク)を魅了し、結婚することを夢みて、娘を念入りに装わせる。

Mrs Durbeyfield was only delighted at this tractability. First she fetched a great basin, and washed Tess's hair with such thoroughness that when dried and brushed it looked twice as much as at other times. She tied it with a broader pink ribbon than usual. Then she put upon her the white frock that Tess had worn at the club-walking, imparted to her developing figure an amplitude which belied her age, and might cause her to be estimated as a woman when she was not much more than a child. (65)

母親によって飾られたテスは、年齢以上に「大人びた姿」、つまり肉体的に「女性」を意識させる姿となっている。そして、結婚という結果にならなかったことを除けば母親が目論んだ通

り、テスは彼を魅了し、私生児を生むことになるのである。また、エンジェルの実家に出掛ける場面でも同様の結果がもたらされる。テスの友人たちは、彼女が彼の両親に気に入られるように、テスを美しく飾る (282)。しかし、結局彼の両親には会えず、偶然アレクと再会するのである。つまり、テスにとって「着飾ること」は、セクシュアリティを表出させることであり、肉体的危険に晒されることになるのではないだろうか。このような皮肉な結果は、この時代における「着飾ること」の意味を的確に反映していると考えられる。

There is notably very little sense in Victorian literature of dress as explicitly pleasurable for women.... Women's dress... does speak sexuality — but it is a sexuality that is both produced and owned by a male observer; one that can only trap a woman into limiting roles. (Reynolds 60)

19世紀ヴィクトリア朝という時代において、着飾ること自体が「良くて軽薄、悪くすれば不道徳」であった(Reynolds 56)。つまり、女性が美しく装うことは、セクシュアリティの対象となる「男性観察者」の存在が常に刻み込まれている、男性に見せるための行為なのである。

肉体を覆い隠す織物の不足もまた、テスのセクシュアリティを表出することになる。アレクによって凌辱された夜、またエンジェルから求婚された夜、いづれの時も、テスは薄着のため、寒さに震えている。アレクは自分の上着を、エンジェルは馬車に積んであった布を、彼女に掛ける。彼らの差し出す織物は、彼女の身体を包むと同時に、心をも縛るものとなるのである。この意味で、男性によって買い与えられる衣服は、彼らがテスを所有していることの象徴となる。衣服や装飾品と引き換えに、彼女を要求するアレクに対し、テスは次のように述べ、その申し出を拒絶する。“I have said I will not take anything more from you, I will not — I cannot! I *should* be your creature to go on doing that, and I won't!” (94) そして、以前に受け取った衣服も弟や妹の服に仕立て直すのである。しかし、家族の生活のためにアレクの情婦となったとき、会いに来たエンジェルに対し、テスは“He has won me back to him.... These clothes are what he's put upon me” とアレクが着せた服を纏い、彼が自分の所有者であることを認めている(356)。⁴ またエンジェルも、結婚式のためにドレス、手袋、ハンカチを贈り、テスの全身を飾り立てることによって、彼女に対する所有を知らしめようとしているかのようなのである(205)。織物と女性の肉体、そして、セクシュアリティの間には、対男性の構図の中、密接な関係があると考えられる。

織物、とりわけ衣服とテスの関係を考えるとき、畑や酪農場で働く彼女の姿に関する描写の多様さ、また詳細さに注目すべきである。例えば、マーロット(Marlott)の麦畑では、木綿のボネットと手袋、ピンクの上着を付けたテスを(103)、トールボセーズ(Talbothays)では白いカーテンボネットを被り、乳搾りをする彼女の姿を(157)、そしてフリントコンム・アッシュ(Flintcomb-Ash)の蕪菁畑では、ボネットを被り、粗い麻布の「作業エプロン」と手甲のある羊革の手袋を付けた彼女の姿を見ることができる(273)。こうした描写は、次のような言及を裏付けるためのものではないだろうか。

A field-man is a personality afield; a field-woman is a portion of the field; she has somehow lost her own margin, imbibed the essence of her surrounding, and assimilated herself with it. (103)

Thus Tess walks on; a figure which is part of the landscape; a fieldwoman pure and simple, in winter guise; a gray serge cape, a red woolen cravat, a stuff skirt.... (269)

つまり、数多く描かれる仕事着姿の彼女の描写は、自然と一体化する「純粹で素朴な」彼女の本質を示すためのものである。この点についてブレイクはこうした自然の中に立つことによって、テスはセクシュアリティから解放されると述べている。

The passage [Hardy's description of Tess as "a field-woman pure and simple"] strips her of individuality to make her a figure in the landscape, and it departs from ethical/erotic signification. (Blake 691)

しかしながら、次の引用は、テスは晴れ着で美しく装うときも、また野良着を身につけていても、いずれにしてもアレクやエンジェルを始め、男性たちの視線を捕らえ、結局彼女の肉体は危険に晒されることを示している。

While the clothes lasted which had been prepared for her marriage, these casual glances of interest caused her no inconvenience, but as soon as she was compelled to don the wrapper of a field-woman, rude words were addressed to her more than once...." (266)

テスはいかなる衣服を身につけようとも、男性の視線から逃れることはできない。⁵ テスの感情を表現し、「言葉」としてさえ機能する衣服であるが、対男性の構図の中では、衣服は女性の肉体との密接な関係ゆえに同一視され、女性性の呪縛から逃れられないのである。

Ⅲ

織物と女性の関係に関して、最も注目すべき描写はアレクによる凌辱の場面であろう。

Why it was that upon this beautiful feminine tissue, sensitive as gossamer, and practically blank as snow as yet, there should have been traced such a coarse pattern as it was doomed to receive; why so often the coarse appropriates the finer thus, the wrong man the woman... many thousand years of analytical philosophy have failed to explain to our sense of order. (88-9)

言うまでもなくこの繊細で純白の薄織物が彼女の肉体である。ここでは、テスの肉体は文字通り一枚の織物にテキスト化されているのである。留意すべき点は、この描写における男女の関係が、テスの肉体という織物にアレクが模様("pattern")を刻み込むという、正しく織物が生成される過程に例えられていることである。このことは女性による創造、生産の可能性を示唆するものではないだろうか。グーバーは女性の創造性について、「子供、食べ物、織物という(人間にとって)不可欠なものを生産する術は女性の究極の創造力である」と指摘する(Gubar

306)。そして、更にこの出来事が原因となり、テスはアレクの子供を身ごもることになることを考え合わせるならば、正しくこの場面は女性が生み出し得る二つのもの—子供と織物—が創造される場面なのである。そして、テスは肉体が織物化されることによって、彼女の存在は織物へ集約され、女性世界を体現するものとなるのである。

その意味で織物に満ちた寝室は正しく女性の空間である。エンジェルに思いを寄せる乳搾りの娘たちの寝室は、彼女たちの気持ちに同調し、一体化しているかのように、その内なる空気を震わせる(154)。また逃亡を続けるテスとエンジェルにとって、ブラムズハースト荘(Bramshurst Court)の寝室は煩わしい外界とは隔絶された空間となっている。その寝室の外側には道徳や社会といった言わば男性世界があり、内側はそのような男性性が存在しない、「愛情と一体感、そして許し」(“affection, union, error forgiven,” 366)という安寧の空間である。つまり隔離され、守られている空間、言わば子宮的空間となっているのである。テスは幼子の死が近づいていることを知り、寝室で自ら子供の洗礼を行う(108-9)。彼女のこの特異な行動は慣れ親しんだ寝室を非日常的な異質な空間に変えてしまうものである。そして同時に、彼女のこの行為は、教会という男性世界の権威の象徴(寝室という)女性空間に取り込み、行為者としての女性の存在を排除してきた男性社会の概念を揺るがすものと考えられるのではないだろうか。そして青鷺荘(The Herons)の寝室の場面には、正しく従来 of 行為者と被行為者の逆転した男女関係を認めることができるのである。⁶ その寝室でテスはアレクを殺害する。彼の血はシーツを染め、床を流れ、階下の天井に大きな跡を記す(359)。テスを穢してきた報いであるかのように彼の血は彼を取り巻く織物テキストによって搦め捕られていくのである。

『ダーバヴィル家のテス』の出版社探しは、そこに書かれた出来事や描写が当時の風潮に合わないという理由のために、困難を極めた。ようやく探し出した雑誌出版社においても、連載中は「道徳のため」という名目の元、所謂「検閲」を受けた形となり、トマス・ハーディは意に反して幾つかの場面の削除、書き換えを余儀なくされた。更に、本の形で出版するに際し原稿を元に戻すが、その後の厳しい反響に、制約を受ける「言葉」の限界、ひいては小説家の限界を感じる(Stott 199)。しかし、このような言語の「統制」と限界の中で、彼はこのテキストに「凌辱」「殺人」「処刑」という衝撃的な出来事を織り込んでいる。勿論それらの出来事に対する直接的な描写はなされておらず、また事実を提示する簡潔な言及以外、説明の言葉もない。状況を語るものは、凌辱の場面における穢された「純白の薄織物」、刺殺された男性の血に染まる「シーツ」、処刑の執行を告げる「黒旗」という「織物」の描写である。登場場面の白い服、チェイスの森での「模様」を記された白い布、そして黒い旗といった織物は、それぞれが読みを促すテキストであると共に、繋ぎ合わせて考えるならば、テスの人生の軌跡を表わしていると言えるのではないだろうか。つまり『テス』というテキストにおいて、織物の描写は、厳しい制限を受ける言語表現とは異なる手段として、物語の状況を語り、解釈を促す記号として機能しているのである。

注

1. 本論文は日本ハーディ協会第39回大会(1996年11月2日、於聖徳大学)において口頭発表した原稿の中から、特に「衣服」の意味に関する部分に加筆修正したものである。

2. 白いドレスに付いた染みは、「緑」という色の連想によって、「緑の麦芽」('green malt,' 47) に関する言及と呼応しているとも考えられないだろうか。

3. 偶然、この空間に侵入してきたエンジェルが、テスをダンスの相手として選ばなかったことも、表面化したセクシュアリティを無意識に回避した行動なのかもしれない。

4. アレクの情婦としてエンジェルの前に現れたときのテスの装いは「服と道徳の最も極端な関連」を表すと考えられる(Reynolds 56-7)。また、テスの母親も“the garb of a respectable widow”を纏っていることも、アレクのテスに対する支配を表すと考えられる(352)。

5. 織物がセクシュアリティを左右するという点において、美しさを覆い隠すことで危機を逃れるという例も認めることができる。エンジェルが一人でブラジルに行ってしまうと、残されたテスは、他の男性から身を守るために、睫を切り、顔にハンカチを巻き、男性の視線を逃れよう(269)とする。

6. ストットはこの場面について、次のように述べ、両者の逆転の関係を指摘している。“In the act of violation Alec had traced a coarse pattern upon Tess. Here, figuratively, she traces the Ace of Hearts upon him: her trump-card.” (Stott 194)

引用文献

- Blake, Kathleen. “Pure Tess: Hardy’s on Knowing a Woman.” *Studies in English Literature* 22 (1982) : 689-705.
- Gurber, Susan. “‘The Blank Page’ and the Issues of Female Creativity.” *The New Feminist Criticism: Essays on woman, literature and theory*. Ed. Elaine Showalter. London: Virago P. Ltd., 1989: 292-313.
- Hardy, Thomas. *Tess of the d’Urbervilles: A Pure Woman*. London: Macmillan, 1891, 1985.
- Miller, J. Hillis. “*Tess of the d’Urbervilles*: Repetition, as Immanent Design.” *Fiction and Repetition: Seven English Novels*. Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1982, 116-46.
- Reynolds, K and N. Humble. *Victorian Heroines: Representations of Femininity in Nineteenth Century Literature and Art*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Stott, Rebecca. “Something More To Be Said.” *The Fabrication of the Late Victorian Femme Fatale: The Kiss of Death*. London: Macmillan, 1992: 163-99.
- Tanner, Tony. “Colour and Movement in Hardy’s *Tess of the d’Urbervilles*.” *Critical Quarterly* 10(1968) , No.3; 9-23.
- Williams, Merino. “Thomas Hardy.” *Women in the English Novel 1800-1900*. London: Macmillan, 1984, 182-6.